

東洋の植物を求めて 植物園・プラントハンター ・園芸家の文化交渉学

著者	野間 晴雄
雑誌名	東アジア文化交渉研究 別冊 = East Asian Cultural Interaction Studies Supplemental
巻	4
ページ	109-135
発行年	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/3297

東洋の植物を求めて

— 植物園・プラントハンター・園芸家の文化交渉学 —

野 間 晴 雄*

要 旨

大航海時代以降にヨーロッパ、とりわけアルプス以北の寒冷な国々では王侯貴族の趣味として、ヨーロッパ以外の花を種子／球根を生きたまま本国に運んで移植し愛でる慣習が広まった。とりわけアングロサクソンのイギリスやオランダはその核心となる。その背景には、薬草学の知識やリンネを頂点とする分類学の発展などがあった。

本報告では、その採集を異国の地で担ったプラントハンターと呼ばれる植物採集の専門家の性格を多角的に考察するとともに、採集を依頼・指示した人びととの関係もとりあげる。次にプラントハンターの東アジアでの一事例として、イギリス人口バート・フォーチュンの日本・中国での採集の方法と成果、歴史的背景を分析する。

最後に、プラントハンティングの対象としてユリとキクをとりあげて、西洋と東洋の文化交渉を園芸、栽培化のプロセスから通観して、事例から迫る文化交渉学の方法論にも言及したい。

1. はじめに — 研究の契機と邂逅 —

今を遡ること33年前、私は人文地理学で卒業論文を書こうとする史学科の学生であった。当時、アングロサクソン系諸国から怒濤のように入ってきた計量地理学、社会物理学と論理実証主義モデルを「地理学の革命」と称して、人文現象のうち、計量可能な人口、交通、流動や生産に関わる統計を大型コンピュータで解析することが流行していた。また、ルーラルな対象よりも都市に関わる対象に学生のとりあげる研究テーマが集中していた。歴史や民俗学、人類学にも関心があり、かつ、上のような流れからは取り残された、「地表上における自然と人間の関わり」という人文地理学や環境論は、とりわけ社会科学的な志向の強い当時の風潮からは片隅に追いやられた存在であった。

* 関西大学文学部教授、関西大学ICIS事業推進担当者

都市化した地域でこじんまりした論文を書くよりは、豊かな大自然のなかで、このテーマを実践したかった。いずれはアジア・アフリカの熱帯という環境にどっぷりと身を置きたかったが、10ヶ月で卒業論文を仕上げなければならない眼前のさし迫った課題をこなすためには、熱帯をフィールドにするには準備不足であり、何よりも資金のあてがなかった。当時の人文系の研究環境は大学院生でも修士課程ではほとんど外部資金は絶望的で、現在のようなグローバルCOE、現代GPなどの文科省・日本学術振興会の重点教育・研究プログラムもなかった時代である。教室も一介の学生のために、資金援助などはまったく考えられない時代であった。ただ探検部（京都大学探検者の会編 2006）や山岳部には例外的にそのルートができており、フィールドワークをする人間にとっては理系の研究環境とともにうらやましかった。

そこで私が選んだフィールドが鹿児島県の離島、とりわけ亜熱帯環境にあるところに目をつけた。テーマとしては、植物と人間・環境との関わりをとらえてみたいという、生態学・生物地理学的発想が胸のうちにあった。それが、19世紀末に九州・沖縄を起源地とする野生ユリの栽培化が、欧米の園芸商社からの需要による球根商品化で実現した。奄美諸島の沖永良部島は、その先発性と進取の気性に富んだ農民の不断の努力によって、国内の独占的な位置を以後現在まで維持している。この状況と近年の変化については本報告の5で若干触れたい。しかし当時は、アイザック・バンティングというイギリス人が沖永良部島に漂着して、島に自生するテッポウユリに注目し、翌年再度島を訪れて球根を法外な価格で買い取ったことから、よりいい品種を自生種から個体選抜して、それを栽培化にまでもっていった事実とプロセスを、フィールドワークやユリという栄養体繁殖、宿根草の生態、社会・経済条件から明らかにしたにとどまった（野間 1978）。

この研究の過程で、17世紀以来、ヨーロッパ諸国のアフリカや新大陸への進出・植民地化に付随して起った、本国にない物産の探査や科学的な調査探検などに付随して行われたプラントハンティングといわれる植物採集のグローバル性には私は気づかなかった。それが、今回グローバルCOEの研究課題として周縁アプローチから東アジアの文化を考えることになって、この30年以上前に取り組んだ小さな地域研究を、大きな世界・アジアネットワークの中で再検討してみようと思えることになった。まさに30年ぶりの邂逅である。

「もの」の文化交渉学—18~19世紀における西洋と東洋の人びととの東アジアでの文化交流を、東洋の植物に即して考えてみたいというのが本報告の趣旨である。対象としては、珍奇で美しい東洋の植物、とりわけ本報告では中国と日本の植物をとりあげる。その際に、その種の保存、育成、普及を図るセンターとなった植物園や、パトロン（植物園や国家的機関）、個人などさまざまところからの依頼をうけて、彼国での採集、買い付け、移送までの業務をになったプラントハンターといわれるプロの植物の収集、それを本国で定着、育成、繁殖させた園芸家、日本・中国で鑑賞用植物の改良、庭園造り、苗木の販売などを行った園芸家などを、一連の文化交渉のアクターとしてセットでとりあげたい。換言すれば、本報告は、中国・日本と

アルプス以北の西ヨーロッパ世界の文化交渉の一事例として、植物の交流とそれをめぐるネットワークの構造をとりあげる試論である。

2. プラントハンターの定義と2類型

(1) 定義とその特徴

プラントハンターとは白幡は「貴族ではない、上流階級ではない、しかし最下層の出身でもない。その中間にあって、しかも中では下層に近い。しかし植物への情熱が人一倍つよい人物であろう。また植物が好きでも、机上で植物標本を研究する植物学者でもない。学者的であってもフィールドを好む野外の観察者、採集者である。」（白幡 1994：270）と定義している。この含意は、未知の地の植物を生きたまま、種子で採集したり、細密な絵を描いたり、標本で記録したりする探検的要素をもったプロフェッショナルである。しかし、学歴、出自からは決してエリートではない人びとが多い。多くは園芸家、庭師、農家の息子などである。彼らは、職人的な気質とともに、科学的観察眼、識別眼を備えており、自然界に生える植物をいかに異なる環境に移植して、かつそれを売れる商品として確立するかという商才にも長けていた。また自国と植物採集する海外を往来し、生き物である植物を枯らさないように移送するための船員、税関、検疫役人や現地の園芸家との買い付け、移送について密接なコンタクトをとることができる交渉力、語学力と文献探索力を供えた人物でもある。

たとえば日本の花木に関しては、シーボルトやケンペルとの植物図録は、未知なる植物獲得したいという契機となる重要な本である。これらの熟読の上で、プラントハンターたちは、採集地のねらいを定めていったのである。ただし、いったん現地にはいると、書籍だけでは得られない有用な情報をいかに入手するかが重要である。その国のどこにどんな植物がどこに自生しているか、そこまでの交通手段、ポーター、案内人・通訳の確保、食糧・安全の確保などをすべて現地でプラントハンター自身がやらねばならなかった。温和な地中海式気候や西岸海洋性気候が卓越する南アフリカでは、園芸文化が現地の人びとのあいだに発達していなかったため、イギリスのプラントハンターたちは、必死に野生種をめざして山野を跋涉した。しかし、植物は野生種だけに限らない。栽培・改良品種で優良なものを見いだして持ち帰ることも重要な役目であった。

とりわけ、ここでとりあげる中国や日本は、すでに18世紀には円熟した園芸文化が都市部で発達し、上流階級のみならず、庶民にまで花木を愛で育てる文化が発達しており、彼らに栽培法を指南し、優良種子や苗木を供給するプロの園芸家・業者も存在した。彼らとのネットワークの形成がかかる地では何よりも重要であった。だれがどんな美しい花木を栽培・育成しているかの、その情報網を彼地で確立する、いわばネットワークの網目で生きるのがプラントハンターたちのもう一つの顔であった。決して向こう見ずな探検家であったわけではない。地図

にない空白を埋めるだけでは彼らは評価されない。そこにある未知の美しい植物を入手し移送してはじめてプラントハンターは評価されるのであり、その意味からも大航海時代の探検家や、フンボルトのような科学的調査（野間 2008：44-49）をめざした探検でも、また内陸の文物を発掘したり、民族調査をしたりする遠征隊や地図作りの測量隊でもない。

しかし、彼らの最終目標は植物の入手にあっても、そのプロセスでは多くのプラントハンターたちが探検記・採集日誌を残している。それらが依頼主の要望であったことも少なくない。また、生きた植物の移送のみでなく、乾燥標本も持ち帰ることも多かった。これは植物学者（botanist）による、科学的な記載や同定のための基礎資料となった。この間の経緯を、イギリスのキュー植物園でプラントハンターの総元締めの役割をし（Banks and others 1994）、42年にもわたり自然科学の学士院にあたるような王立自然協会の会長に君臨したジョゼフ・バンクス（1743-1820）の次の言葉が雄弁に物語る（野間 2009）。

「したがって、植物を乾燥することは、植物学者がたんにそれを利用しようとするにとっっては有用である。しかし栽培者（cultivator）の立場からは、その有用性や美しさという理由のみならず、必要とされる種子や植物を本国に送るためにも必要なことである。種子は遠方から運ぶのにも、軽量であるとともに完全に目的にかなうのである」（*Rules for Collecting and Preserving Specimens of Plants*, 1796）

もうひとつ、プラントハンターの特色としてあげておかねばならないのは、いわゆる彼らの地位上昇のキャリアアップコースが暗黙のうちにできあがっており、リスクも大きいわりに成功すると、それなりの成功報酬と名声・評価が生まれ、それが次のパトロンからの注文にも連動していたことである。そのキャリアアップコースを図式的に示すと以下ようになる。

- 1) おかかえ庭師、園丁
- 2) アジア、アメリカ、アフリカへ渡り、プラントハンティング
- 3) 植物貿易商社経営
- 4) 探検記、採集記執筆
- 5) 植物園副園長、園長

このコースは、冷涼で貧相な植生の反動故かガーデニングがいろいろな階層で盛んなイギリスで典型的にみられる。しかし、そのほかの国、たとえばオランダやスウェーデン、フランスでも当てはまる。

アメリカ西部の植物を系統的に集めたデイヴィッド・ダグラス David Douglas (1799-1834) の例をあげよう。生まれはスコットランドのパーサーの石工の子で、小さい頃はまともな教育をうけず学校を飛び出し、その地方のマンズフィールド伯の園芸頭であったウィリアム・ビーティーの徒弟となる。ここで7年間修行のあと、准男爵のサー・ロバート・プレストンの園丁になる。1820年にはグラスゴー植物園に転じ、そこで植物学教授、のちにキュー植物園園長となる W・J・フッカーの助手になり、スコットランドの植物誌のための植物採取で才能を

認められた。

フッカーはロンドン園芸協会が北米に最初の採集者を派遣する計画を知り、ダグラスを推薦した。ダグラスは東部諸州で果樹の苗を採集、入手することを中心としたが、そのほか博物学的な幼い時からの嗜好もあって、多数の興味深い植物の種子、乾燥標本、生きた植物、それに自生・分布地域での詳細記録をイギリスに持ち帰った。しかも動物にまで関心を示し、アメリカオシヤウズラも生きたままもち帰った（ホイットル 1983：84）。その成功話が伝わると、ロンドン園芸協会は再び彼をカナダの未踏の地、ハドソン湾会社（1670年にアメリカインディアンと毛皮交易をするために設立された会社）からダグラスモミヤシュガーパインなどの美しい球果類などを採集し、北アメリカ大陸を横断してプラントハンティングを行った。

帰国後は、園芸協会のみならず、リンネ協会、地理学協会、新設の動物学協会の会員に推挽され、ダグラスの評価はいっそう高まった。園芸協会では新しい品種を手に入れると、それをふやして会員に頒布するシステムなので、「血紅色のスグリ属」(*Ribes sanguineus*)を売り上げただけで、彼の探検費用（400万ポンドより少ない）の全額に等しいとみなされた（春山 1980：639）。それと同時に日誌執筆の費用も与えられた。それでも名声とは別に、成功報酬は決して十分なものではなかった。ダグラスは、時として常軌を逸した行動をとることもあったが、多くの帰国後はその目を見張る成果品ゆえに、熱狂的な歓迎をもって迎えられた。彼は1829年さらに3回目の採集をカリフォルニアと北米西海岸で行った。このような博物趣味が一生の仕事となって、ダグラスはフィールドで科学的知識や採集技術、鑑識眼を磨いていった。しかし、彼のキャリアアップはそこでとまってしまった。1830年サンドウィッチ島での探査の途中、原住民が野生牛を捕らえる罠に落ちて死んでいた。事故死か他殺かはわからないまま本国に返された。

(2) プラントハンター、プラントハンティングの2つの類型

プラントハンターの一般的な特徴については上に述べたとおりであるが、筆者は、文化交渉や植物交流の側面からは、その採集地がどこであるかによって、プラントハンティングという行為やその担い手であるプラントハンターに次の2つの類型を措定したい。ひとつが熱帯植物・経済植物採取（食糧・薬草利用）をするプラントハンティング／プラントハンターである。あとひとつが、海外の温帯地域で植物を採取し、本国へ移出する類型で、これは本国での庭園での観賞用の需要を見込んだものである。以下、それぞれに簡単な説明を加えたい。

1) 熱帯植物・経済植物採取（食糧・薬草利用）型

熱帯の希少種を採取し、それを熱帯植民地で繁殖、改良したり、他の熱帯地域に移植して、産業振興に役立てるものである。つまりこの類型でプラントハンティングされるのは有用植物であり、英国では経済植物（Economic Botany）という分野が確立した。本来は薬草が中心で



図1 ロンドン郊外のキュー植物園の温室（世界文化遺産）

あったが、しだいに繊維（ジュート）、嗜好品（コーヒー、茶、カカオ）、サトウキビ、ココヤシ、アブラヤシなどに移行していった。その際、馴化と移植が重要なポイントとなった。

その資源バンク、収集・改良・研究のセンターとしての役割を果たしたのが熱帯の植物園である。オランダ領東インドのセンターは、ジャワ島にあるボゴール植物園である。大英帝国では、インドではカルカッタ植物園やセイロン島コロomboの植物園がそれに該当する。しかもそれらは本国の植物園と密接な関係をもっていた。ボゴール植物園の場合はライデン大学の附属植物園であり、イギリスの場合はキュー植物園や、それよりも設立が古い、薬園に起源をもったチェルシー植物園である。いずれもロンドン郊外に広大な土地を持った貴族の庭園、宮殿の付属物から出発していることも興味深い。

世界の植物園はイギリスのキュー植物園やチェルシー薬草園のように、宮殿に付属または隣接して、王族・貴族の興味を満たすことから出発したものが多い。薬草から有用植物の効能がリストアップされ、その繁殖、種の保存がされた。その前提として植物の形態の正確な記載を必要とした。そこから形態の系統分類がなされた。分類学の発展は植物学の発展に不可欠である。写真がない時代には、お雇いの専門画家に植物を正確に描かせるボタニカルアートも成立した。それらをあつめたのが植物図誌である。植物園はこのようにして形態分類された。

キュー植物園は今年（2009）に設立250周年を迎える。ロンドンの南西郊外20km、テムズ（Thames）川右岸、S字状に蛇行する滑走斜面にある。地下鉄district線で代表的な郊外都市（garden city）リッチモンドの一駅手前の駅で、中心部から約45分で着く。2003年に単独で世界文化遺産に登録された。面積は121haで、国内外の観光客やガーデン好きの英国人の散策の場となっている。この地は1718年、キュー宮殿（Kew Palace）にジョージ2世の息子、ウェールズの皇太子フレデリック（Frederick）とサセゴータ（Saxe-Gotha）が1736年に結婚してその後住んだ地である。1752年、オーガスタ内親王は筆頭庭師のジョン・デイルマン

(John Dillman (後の夫)) に命じてButeを助手にしてOrngaryに隣接して9エーカーの庭を造らせた。東インド会社社員として中国に滞在したことのあるW. チェンバース (William Chambers) ¹⁾ によって、東洋趣味が植物園内に再現された。イスラム様式の建物も庭園内に彼によって建築された。Bellona, Arethusa, Aeolusなどのドームをいだいたパゴダが園内の丘の上に築かれている。

そのあとを継いだ庭園設計者がケイパビリティ・ブラウンである。ブラウンは従来の装飾的な建築を廃して、植物を中心とした改造を行った。当初は評判は良くなかったが、20年後にはその先見の明が賞賛された。

事例としてのボゴール植物園

ボゴール植物園 (Kubun Raya Indonesia) は1817年5月18日、オランダ語でボイデンゾルフ国立植物園 (s' Lands Plantentuin te Buitenzorg) として開館した。イギリス占領期 (1816-17) の総督ラッフルズ卿 (1781-1826) の発案で、プロシア生まれのオランダの植物学者ラインワルト Caspar Georg Carl Reinwardt (1773-1854) が創設した。インドネシア全域はいうにおよばず、熱帯・亜熱帯の世界各地の有用植物が栽植されている世界最大級の植物園である。1962年以来、国立生物学研究所 (LBN) に所属し、90年以降は組織改革でLBN自体が生物研究センターと植物園部門に分かれて現在にいたっている。



図2 ボゴール植物園内にあるラッフルズ夫人の慰霊碑

1) William Chambers (1723-1796) はスコットランド生まれの両親の家に生まれ、若くしてスウェーデンの東インド会社に働かれて中国に行き、そこで中国の建築に魅せられた。26歳のときにローマで本格的に建築を学び1757年に公式のオーガスタのお抱え建築士となり、彼女の息子の家庭教師になった。宮殿の建築を手がけたばかりでなく、キュー庭園に25以上の装飾的な建物を設計したが、そのひとつが現在も残っているパゴダである

ボゴールはジャカルタの南約60km, 標高260m, 人口約40万人の中規模都市だが, 年平均降水量3000~4000mm, 湿度80~90%の湿潤なゆるい雨季と乾季をもつ熱帯モンスーン気候である。農学では国内でもっとも評価の高いボゴール農業大学が位置しここにある。

白亜の宮殿もフランスのベルサイユのバロック庭園(絶対王政期の幾何学式庭園)やイスラムの庭園のような厳格なシンメトリック構成ではなく, 前庭に池を配置した不規則な周回路や芝生, 花壇があり, 熱帯の鬱蒼とした木々の間はオープンな空間となっている。自然のチルウイン右岸川がもとは植物園の東限であったが, 1892年に東の部分が拡大され, 1927年さらにその東に熱帯雨林, シダ園など新たな部分が加わった。もとの部分は南米原産のオオオニバスが浮かぶヴィクトリア池や288種ものヤシ類, 30mもの高さになるタケ類, ラン類, チークなどの有用樹がこの植物園の目玉になっている。

この植物園の特色はイギリスの風景庭園を取り入れたボゴール宮殿(Istana Bogor)に隣接していることである。国を背負って立つ人たちのリクリエーション, 饗宴接待の場, 好奇心を満たす空間としての機能が当初からあったとみてよい。その意味では, ロンドン近郊の王立キュー(Kew)植物園(1759年ウィリアム・エイトンが園長就任)はもともとオーガスタ内親王の宮殿の庭園であったことと共通する。

ボゴール宮殿自体は1740年代にオランダ東インド会社(VOC)第27代総督ファン・イムホフ(Van Imhoff)が開墾を進め, 1745年に別荘を建てたのに始まる。その後, ダーエンデルス(Herman Willem Daendels: 1762-1818)やラッフルズなど歴代の総督がここに居を構えている。1870~1942年には植民地総督の公邸として利用された。ただし現在の建物はサラク(Salak)火山の爆発で破壊されたのち1856年に再建されたものである。面積28.4ha, 白亜の1階建て, 両翼に国賓室や劇場も備える。キリスト教もイスラム教の意匠もここではほとんど表に現れない。

この植物園の前身は1811年にラッフルズが宮殿内にキュー植物園から2人の庭師を呼んで作った小さな植物園にある。インドネシア独立後はスカルノ大統領の別荘として使用され, スカルノ第2夫人ハルティニの居所となったが, 晩年のスカルノが幽閉されたりもした。現在でも外国からの要人の接待に使われ, 1994年にはAPEC首脳会議がここで開催されている。

植物園とは広義の博物館である。博物館はモノを科学的な方法にしたがって配列・展示するため, 調査・研究と収集・保存と公開・教育のという3つの業務があるが, 前二者は「知の生産」を, 最後者は「知の消費」を担う。植民地時代は調査・研究, それも有用な熱帯経済植物やその種子の収集に力を入れてきた。

ラインワルトは900種余りを収集, 最初のカタログが1923年に2代植物園長のC. L.ブルーム発行した。1830年にオランダ人庭師のE. テスマン(1808-82)が学芸員(実質は植物園の責任者)として任命されて, より網羅的, 科学的かつ実用的な充実を図られた。彼はスンダ列島をはじめ広くマレー群島の植物探査を行うとともに, キニーネのジャワ導入(1852-54), 科ごと

体系化と園内植物の大規模移植を試み、図書館（1824）、植物標本館（1844）を建設した。1848年にはアブラヤシを西アフリカから移入し、デンプン質の生産効率が高い南米原産のキャッサバをインドネシア全土に広めたことでも知られる。

オランダ人の3代目園長（1869-80）のシェファーはオーストラリアのユーカリ、タバコ、メーズ、リベリアのコーヒーなどの台木を育成して種や接ぎ木を全土に配布した。39年にわたって植民地の農業・経済植物の研究の大車輪となり、有用植物の導入・普及と、オランダ領東インド全域にわたる植物の採集、記載に全勢力を注いだ。その人柄に私はいへん惹かれる。4代園長（1880-1910）のM.トロイブは有用植物の病気についての研究など、より農業へ特化する方向が顕著になった。日本占領時（1943-45）は植物学者、東京帝国大学理科大学教授の中井武之進が園長となった。軍部の木材伐採に反対したことでも知られる。

鎖国時代、日本はシーボルト（1796-1866）というプロシア生まれのオランダ商館医・博物学者が著した『日本植物誌』（大場 2007）の美しい花の挿絵は19世紀に活躍するプラントハンターたちのバイブルともなった。ジャワやスマトラは熱帯植物、未知の植物の宝庫ではあった。ただしアフロシアのような珍奇な花が見せ物として本国で賞賛されても、鑑賞用園芸作物という範疇では、冷涼なフランドル地方で育つ保証は温室出現までなかった。ただしオランダではイギリスのような帝国ネットワークにより、プラントハンター、植民地植物園を配下に置いた顕著な階層構造を作ることはなかった。

とりわけイギリスのプラントハンターは中国、日本、インド・ネパールの山岳地の美しい花（日本ではキク、サツキ、ユリ）に異常な情熱を燃やした。しかしオランダの採集家はライデン大学附属植物園などと密接な連携をもちながらも、ポイデンゾルフ植物園を植民地支配の地域センターとして機能させ、移入有用作物、樹木を導入するなど地域新興と熱帯地域の植物研究の中核たろうと地元で足を下ろしたことに特色がある。ボゴール植物園が「馴化植物園」といわれ、それが現在、世界の熱帯植物の研究者たちからも評価される所以でもある。

2) 温帯植物採取、本国へ移出（庭園需要）型

この類型は、ヨーロッパ諸国の貴族ら上流階級による異国趣味、東洋趣味に端を発している。本来は自らの庭／庭園（ガーデン）をうめる美しい花を重視した。草本類を多用し、フランスのバロック庭園（ヴェルサイユ庭園がその典型）からの離陸でもあった。

シンメトリックで整然とした庭園を好まないイギリスで最もその傾向が顕著に表れる。いわゆる「イングリッシュガーデン」の成立（中尾 1999）が、寒冷なイギリスの地でも育つ花の美しい草本類の需要を喚起した。ただし日本で江戸時代に流行した斑入りの葉など一種の奇形、突然変異の葉を珍重するような傾向はほとんど見られなかった。しかしながらにおいへの嗜好は強烈で、花は芳香、それもかなり強いにおいをもつことが重要であった。

冷涼なイギリスでは地中海性の植物でさえ、雨量の点では条件を充たしていても、なかなか

露地では育たない。そこで目をまずつけたのが、ロンドンから航海すると比較的アプローチが容易な南アフリカであった(表1)。キュー植物園にも南アフリカの植物はことさら多く収集されて、温室に展示されている。

プラントハンティングが後期(19世紀)になると、中国や、シーボルトやツンベルクの図録に魅せられた日本への関心が高まる。しかし、イギリスをはじめヨーロッパ列強にとって、東アジアは最も遠い、古い文明と強大な国家が盛衰してきた地域であり、かつ高度な文明、文化をもっていた国であった。北アメリカやオーストラリア、南アフリカのような彼らにとってはフロンティアと思われた人口過少地域の探検ではすまされない側面を有していた。

しかも日本・清国とも鎖国あるいはそれに近い状況が19世紀半ばまで存在したのであり、外国人が入り込める場所は非常に限られていた。内部に入ることが非常に困難な地域であった。1840年のアヘン戦争の勝利とそれに続く南京条約によって、広州、福州、厦門、寧波、上海が開港され、香港が割譲されたが、いずれの地域でも早々に植物調査が行われ、いくつかの植物誌が刊行されている。これらの地は上海、寧波を除くと、多くは亜熱帯の地であり、イギリスにとって移植できる美しい花本類、草本類は必ずしも多くはなかった。その点、温帯の日本はイギリスにとって有用な植物が得られる可能性が高かった。ただ当時は、長崎だけが公式の外国との窓口であり、出島の幽閉されたような空間では植物採取は不可能であった。そこから少し離れた長崎のきの郊外に日帰りの行動が許されると、競って隠密に植物採集が行われた。

また、1860年に神奈川、下田、新潟、函館など5港が開港されると、とりわけ、横浜の居留地に本拠を置きながら、自由に外出がままならない条件にもかかわらず、公使の随員として江戸／東京への参府の途中などに、たくみに植物採集を行うプラントハンターがでてきた。しかし日本のような円熟した園芸文化をもった国では、野生種、自生種を採集するよりは、園芸家、園芸作物を栽培する農民と直接接触して、苗木、種子などをわけてもらうことの方が重要であった。この開港直後に来日したイギリスのプラントハンターのロバート・フォーチュンについては、5で詳述する。

一方、緯度は低くても、高山地域のために常春・あるいは冷涼な気候となる雲南省から四川省にかけて山岳地や、東南アジア北部、とりわけビルマからイラワジ川、サルウィン川、メコン川、長江、ブラマプトラ川などが襲を寄せあうように収束する奥地からヒマラヤにかけての地域は、最後のプラントハンターたちの壮絶な競争が繰り広げられた場所である(表1)。ただしこの中国奥地への踏査が可能となった背景には、清国の国力弱体化に乗じたヨーロッパ列強による半植民地のプロセスでもあったことも忘れてはいけない。

表1 日本と中国・東南アジアのプラントハンター関連略年表

西暦	日本	中国・東南アジア
1682	アンドレアス・クライアー，出島のオランダ東インド会社商館長に就任（～83）	
1690	エンゲルケルト・ケンペル，来日	
1698		ジェイムズ・カニンガム，厦門に到着
1712	ケンペル，『廻国奇観』	
1715		英，広東に商館設置
1727	ケンペル，『日本誌』（英訳本）	
1740		ピエール・ダンカヴィル，北京に到着。
1753		ダンカヴィル，乾隆帝にオジギソウを献上。ベンジャミン・トーリン，東インド会社駐在員として広東に赴任
1757		外国貿易，広東港に限定（貿易制限令）
1762		オランダ，広東に商館設置
1770		カニンガム，二度目の訪中で舟山に滞在
1775	カール・ペーター・ツンベリー，バタヴィア経由で長崎に来航	
1784	ツンベリー，『日本植物誌』	
1792		英使節マカートニー一行とともにジェイムズ・メイン，イギリスを出航 メイン，ケープタウンでフランシス・マッソンと会談
1793		マカートニー一行，熱河で乾隆帝に拝謁
1794		メイン，セント・ヘレナで雇主ギルバート・スレイターの訃報に接す
1803		ウィリアム・カー，広東の東インド会社商館長デヴィッド・ランスとともに訪中
1804		カー，コーチシナからマニラへ（同年12月～翌年9月）
1812		カー，セイロン（現スリランカ）の植物園園長に就任
1816		英使節アマーストとともに，クラーク・エイブル，中国を訪れる
1819		英，シンガポールを領有し商館建設
1823	フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト，長崎に来航	
1828	シーボルト事件（シーボルト，出島に約一年拘禁。天文方高橋景保，処罰）	
1830	シーボルト，国外追放処分をうけ，長崎を出航	

1834	ウォードの箱考案	ウォードの箱考案, イギリス東インド会社の中国貿易独占権撤廃
1835	シーボルト, 『日本植物誌』(ツツカリニと共著)	
1842	シーボルトの尽力により, ライデンに馴化植物園創設	ロバート・フォーチュン, ロンドン園芸協会より中国に派遣される
1843		フォーチュン, 中国に到着
1845		フォーチュン, マニラ訪問(1月~3月)
1848		フォーチュン, 東インド会社の社員として中国に渡る
1852		フォーチュン, 東インド会社の求めに応じて三度目の訪中
1855	ジョージ・ロジャー・ホール, 来日	
1858	日蘭修好通商条約の結果, シーボルトの追放処分取り消される	天津条約(対, 英・仏) フォーチュン, アメリカ政府の要請により中国へ
1860	ジョン・グールド・ヴィーチ来日。オールコックとともに富士登山。 ロバート・フォーチュン来日。ホールの庭でアオキの雄木発見。日本の5港開港。 カール・マキシモヴィッチ, 箱館に来航。	ヴィーチ, ランを求めてフィリピンへ
1861	リチャード・オールダム, 来日	フォーチュン, 北京へ
1862	マキシモヴィッチ, 横浜に滞在し, 箱根・富士山で採集	
1864	ヴィーチ, オーストラリアと南海諸島へ(~66)	オールダム, 台湾へ
1867		ジャン=マリー・ドゥラヴェー, 中国に派遣される ポール・ファルジェ, 中国に派遣される
1872		ダヴィッド, 中国再訪
1874	アイザック・バンティング横浜に到着	
1877	チャールズ・マリーズ, 来日。東京~青森まで徒歩旅行, 八甲田でオオシラビソを発見, その後北海道へ。エドワード・シルベスタモース妻子と再来日(~1879)	
1878		マリーズ, 香港経由で台湾へ
1879	マリーズ, 中国へ渡り, 長江三峡地帯を探訪	
1881		オーガスティン・ヘンリー, アイルランドのベルファーストから上海へ
1886		ポターニン, 青海湖からゴビ砂漠を横断し, キャフタへ
1892	ジェイムズ・ハーバート・ヴィーチ, 来日, 富士登山 ヴィーチ, チャールズ・スプラーク・サージヤントとともに鳥海山へ	
1893		ポターニン, 二度目の中国探検旅行

1899	アイザック・バンティング沖永良部島でテッポウユリを発見, 栽培奨励	アーネスト・ヘンリー・ウィルソン, ボストンのアーノルド樹木園を経てサンフランシスコ経由で中国に渡る (ヴェーチ商会の要請による)
1902		ヴェーチ商会の要請でウィルソン中国再訪
1904	日露戦争	
1905		ジョージフォレスト, アーサービューリーとプラントハンティング契約, ビルマ経由雲南へ オランダ領インドネシ成立, シベリア鉄道開通 フランクマイヤー, 北京に到着, 最初の採集旅行
1907		フランク・キングドン=ウォード, 上海のパブリックスクールの教員となる ウィリアム・パードム, ヴェーチ商会とアーノルド樹木園の依頼に応じて中国へ
1909		マイヤー, 二回目の採集旅行 (~12)。コーカサス, サマルカンド経由で帰国 キングドン=ウォード, 動物学者マルコム・アンダーソンと中国国内の鳥獣調査旅行
1910		ウィルソン, ユリの新種を求めて中国再訪 フォレスト, ジョン・ウィリアムズを後援者として中国再訪
1911		キングドン=ウォード, ランゲン経由で雲南の騰越に入る (以後, 雲南・四川・甘肅, チベット, ビルマ, アッサム地方に二十回近い探検旅行)
1912		フォレスト, ウィリアムズの後援により三回目の訪中 マイヤー, 三回目の採集旅行 (~15)
1914	サージャント, アーネスト・ヘンリー・ウィルソンを日本に派遣 ウィルソンの送った久留米ツツジ, 米国で大好評	レジナルド・ファーラーとパードム, シベリア経由で北京入りし, 卓尼で第一次世界大戦の勃発を知る
1917		フォレスト, メコン川とサルウィン川の分岐点付近で収集活動 (~19)
1919	ウィルソン, 再来日	
1922		ヨーゼフロック, 中国に滞在 (のべ27年)
1925		フォレスト 6 回目の探検, ビルマ国境地帯
1927	コウリングウッド, イングラム来日, サクラを収集	
1930		フォレスト 最後の探検, ヒドコート庭園のメジャー・ローレンス・ジョンストン同行
1932		フォレスト, 中国で没す

注: アリス・M・コーツ著・遠山茂樹訳『プラントハンター東洋を駆ける』八坂書房, 2007の年表から野間が抜粋し, 他の文献から追加

3. フォーチュンの採集法と観察眼

ロバート・フォーチュン (Robert Fortune : 1812-1880) は、スコットランドのベリックシャーのケロー出身で、生地で学校を卒業後、園丁として奉公し、エジンバラの王立植物園の園丁に推奨され (1841)、その後、ロンドン園芸協会経営のチズウィック庭園に1840年頃から勤務した。このロンドン園芸協会は1804年に設立された、園芸植物の観賞と学術研究、教育・普及を目的とした団体である。その創設者は世界の植物採集のパトロンとなり自らもクックの太平洋航海、オーストラリアやアイスランドで植物を採取したジョゼフ・バンクス、キュー植物園 (Kew Garden) の園長ウィリアム・T・アイトン、陶芸家ジョン・ウェッジウッドらの貴族・上層階級である。会員にはイギリスの著名な専門の園芸家と熱心で資金豊富なアマチュア園芸家も名を連ねた。この目の肥えた園芸家のなかで、東アジアからもたらされた植物に強い関心を寄せた。

(1) 中国でのフォーチュン

折しも中国では英国と清の間でインド産アヘンの密貿易の常態化、茶・絹などの輸出による銀の流出などの財政問題から、欽差大臣として林則徐を広東 (現在の広州) に派遣して強権的にアヘンを没収、棄却したことでアヘン戦争 (1840-42) が勃発した。その結果、清は大敗して南京条約 (1842) で、香港割譲と江南5港 (広州、福州、厦門、寧波、上海) の開港を余儀なくされた。それまでは、ポルトガル領のマカオと広州以外には外国に門戸が開かれておらず、東インド会社社員として、居住者の移動もこの2つの都市内にほぼ限定されていた。そこに4つの窓口が増えたのである。これ以後、秘密のベールに包まれていた中国の植物事情がこの沿岸都市の周辺からイギリス本国に入ってくるようになった。

以前に比べると国内の移動も40~50マイルは可能になった (コックス 2000 : 172)。まず目を付けたのが、杭州湾にある舟山群島^{チュウシャン}と香港島であった。舟山には1699~1710年にイギリスの在外商館があり、早くから一定の情報集積があった。そこを根拠にカニングハム、カメロン派の外科医セオドア・カンター²⁾ やウィリアム・T・アレクサンダーなど、軍属の外科医による植物採集が行われた。香港に関してはベンサムによって *Flora Hongkongensis* (『香港植物誌』1861) が著され、550属、1000種の植物が記載された。ほぼ全島が険しい岩山で、面積的にも狭い (70km²) が、九龍半島に対向するビクトリア水道側に植民地施設が集中するため、狭い割には亜熱帯性の多様な植物が採集された。ツツジ・シヤクナゲ類 *Rhododendron*

2) 1845~46年に英国軍艦 H. M. S. プロヴァー号の外科医で、琉球列島、舟山群島、福州、香港、上海近くの呉松、厦門などで植物採取したが、シダ類やコケ類採集に熱をあげた。この時期には、単に美しい花のみならず、さまざまなジャンルの植物採取家が出現したと見てよい。

*Championae*がとりわけ注目され、ジョン・ジョージ・チャンピオン陸軍大尉（1815-54）はキュー王立植物園にそれを導入した。

これらの職業軍人や軍医とは異なる身分の植物採集者の代表がフォーチュンである。彼はイズウィックのロンドン園芸協会から派遣されて中国に向かった。日本や朝鮮の滞在も含めて東アジアのべ滞在年数は19年を超える。

しかし彼は未知の地を探索して稀少な植物を探し当てる探検的な植物採集家ではなかった。次の評価が正鵠を得ている。

ロバート・フォーチュンは南京条約締結以降に最初に中国に入った植物採集家（plant collector）であった。しかし彼は、前述のデイビッド・ダグラス（David Douglas）やロブ兄弟のように、文明の地（ヨーロッパ）で未知の植物を未知の地に分け入って採集するプラントハンター（plant hunter）ではなかった。中国はヨーロッパとは文化は異なっても、当時からすでに文明化した国であった。採集に行くにしても、フォーチュン仕事の多くは中国人の苗木商から珍しい植物を購入することであった。しかしその駆け引きをフォーチュンは中国人が自分と喜んで商売したがついていると思こんでいた。それは時として中国の文化に親しむことになるとともに、ある種の危険要素でもあった。フォーチュンのこの性向は駆け引きを大々的にやることを可能にし、中国で得られた経験と植物を活かして、最終的には紅茶産業をインドで発展させる使命を与えられた。（Mary Gribbin & John Gribbin. 2008: 189）

1843年7月、プラントハンターとして香港へ派遣されたフォーチュンは、開港場から30マイル（=約48km）の範囲は外国人でも自由に行動ができたため、ここを拠点に上海、廈門、寧波、福州、舟山列島での植物採集が中心となった。委託先の園芸協会は観賞用の植物を求めているので、現地での植木屋をみつけてそこから苗木を買い求めることと、墓場を主な採集地とした。ツバキやボタンなどの花木を墓に植えること、墓場花として草木を供えることを知っていたことによる（白幡 1994：142）。

フォーチュンは1844年5月には寧波に滞在し、茶の生産と茶樹の栽培法について詳しく見聞を深めている。とりわけ、西洋人にとって、黒茶すなわち紅茶と緑茶は茶の品種が異なるという言説がそれまで信じられていた。

「植物王国中国で茶の栽培ほど人びとの耳目を集めてきた話題はほとんど無い。丘陵部での栽培、紅茶・緑茶を作る特別の品種、茶葉の加工法などに関してはいつも特別の関心をひくことであった。過去における中国政府の警戒心のために外国人が中国国内の茶栽培地域に入り込むことを妨げている。そして中国人商人によってもたらされる時としてたいへん断片的な情報でさえ、信頼に足るものはほとんどない。したがって、われわれはイギリスの著者が紅茶と緑茶が同じ品種から生産され、色が異なるのは単に加工法の違いによるという説と、紅茶は植物学者が *Thea Bohea* と命名した木からとれ、緑茶は *Thea viridis* という木からとれ、いずれもイングランドの庭園で長年植えられているものであるという、まったく対照的な2つの説がある

(Fourtune 1842 : 197-98)」。]

このような、紅茶と緑茶が同じ茶の品種かどうかという基本的な問題すら当時はわかっていなかった。しかるほど、南京条約以前の中国は西洋にとって神秘の国であった。

「したがって、私の実際の観察によって、イギリスに帰国する前に、紅茶は *Thea Bohea* から加工され、緑茶は *Thea viridis* から加工せられるという説を正確に確かめることができた。中国の北部 [フォーチュンは浙江省を北部としている、これに対して南部とは広東省をさす] から福州への帰途、福建省の閩川^{ミン}のほとりで私は確かに茶が栽培された丘陵でこれまでは紅茶ができるとされていた *Thea Bohea* を発見し、この品種は、実際は *Bohea* 丘陵という地名に由来するものであることがほぼ確実に判明した。さらに私を驚かせたのは、福州付近の茶を栽培している丘陵部の茶の品種は北部 [浙江省] の緑茶とまったく同じものであったことである。ここで緑茶の茶園が *Bohea* (紅茶) 丘陵という地名に存在したのであり、*Thea Bohea* という単体の樹木は見られなかった。私が訪問したとき、さらに地元の人々は紅茶の製茶工場で働いていた。茶樹の種に特有な差違を私はよく知っていたから、この発見をことのほか驚き、また楽しませてくれた。そして、私は植物標本にするための一組の見本を採集した。また、生きた茶の木を引っっこ抜いてそれを浙江省へもっていくことにした。その結果、浙江省で栽培されている緑茶と何ら変わるものでないことが判明したのである」(Fourtune 1842 : 200)。

つまり、フォーチュンによって、初めて、紅茶と緑茶は同じ茶の品種で、製茶の加工工程だけが異なるという、現在の知見からは常識的な事柄がこの時点で確定されたのである。鋭い博物学・生物学的な観察眼と、その植物標本をとり、現物を比べるという形態学の基本的な手続きを踏んでこの結論が下されたのである。大英帝国の植民地として茶が北西インドで栽培されていたが、フォーチュンはより良質なものを栽培する方策をイギリスに提案し、この神秘のベールに包まれた中国の茶の核心地からの移植の方法を考えている。

この旅行記は中国内陸部の生活実態のみならず、有用植物、観賞用の花・樹木に関する情報を5つの開港場の周辺からのプラントハンティングによって明らかにした点で、園芸家、植民地官僚の注目をひいた。

そのためフォーチュン1848年6月にはイギリス東インド会社の社員として、中国の茶の樹をインドに移植する任務を請け負った。その結果、49年には茶の樹と種子を海路でカルカッタへ送ることに成功した。当時、カルカッタには熱帯植物園が設けられていた。インド各地からの有用作物、有用植物を収集していただけでなく、この例のようにインドに良質の茶を根付かせるための、半ば秘密裏に中国から茶を持ち出されたものを、普及させるためのセンターの役割も植物園は果たしていた。

さらにフォーチュンは1858年には4度目の訪中を果たす。イギリスから独立した新興のアメリカ政府から、自国での茶の樹の収集を依頼されたものである。これは南部で茶のプランテーションを奴隷労働力で行おうとした試みが背景にあったが、南北戦争(1861-65)の勃発によ

ってフォーチュンの仕事は水泡と化した（コーツ 2007：168）。

プラントハンティングは自らの採集癖や科学的な追求態度によってもなされるが、これは一義的な理由でない。必ず、依頼主があり、その顧客の目的に沿った植物採集を行うのもので、純学術的な植物採集とは大きく異なる。そうしなければ、顧客から受けた前払い金は自分のものとはならないのである。成功報酬ではなく、一部は準備費として前払い金の形で支払われたが、自らの植物採集には、運送費、現地人夫の雇用費、滞在諸費、保険、採集のための用具・消耗品などの購入費用などを一切含んだものである。自らの名声をあげるためには、しっかりした現地での仕事をするのが必須であった。とりわけ海賊・匪賊が多い中国の沿海部では、いつ襲われ金品や命を奪われ兼ねない。フォーチュンは中国では何度もそういう危ない目にあっているため、契約時には武器の常備と、そのためのコストに見合う報酬を要求している。

（2）日本における植物採集旅行の意義——中国での経験の相対化——

フォーチュンの日本訪問は1860年である。1859年に中国に滞在中に、日本が開港（長崎、横浜、箱館）した情報をいち早く得て、急遽日本に向かっている。プラントハンターの資質として、このようなすばやい外国情報が非常に重要な役割果たす。未知の国日本は彼にとってどのように映ったのだろうか。

『北京と日本』（1863）は初めて日本を訪問した際の旅行記である。後半の北京の記述はこれまで中国ではもっとも北でも上海どまりであった訪問が、北京を初めて訪問した際の見聞記である。

最初に日本に上陸したのが長崎であった。「船がこの甚だ奇観を呈する、切り立った岸壁に沿って帆走すると、その周囲には、驚嘆すべき島々が孤立していた。根を張った松に掩われた小島は、ちょうど日本ヤシの庭園でよく見る、石を廃した築山のように見えた。いや、まったく、これらの島々は庭園の趣というより、むしろ自然の庭園そのものであった」（フォーチュン：1959：3）

瀬戸内海の光景については「われわれが通過した所の景色は、絵のように美しかったとはいえず、島は豊かでもなく、肥沃にも見えなかった。浜寄りの段々畑の取るに足らぬ産物は例外として、その辺の土地は、農夫が土を掘り起こそうという試みたこともない、自然のままの状態に思われた。明らかに、不毛の赤土のついた花崗岩や粘板岩などの岩がどこにもあって、とばしい作物の中に発育不十分のモミの木が見られた。だが、おそらく春や雨季に丘が緑になるとき、島々はそのような不毛の状態でなくなるかもしれない。それにシナと同様、海岸地は痩せ地でも、内陸は豊かで肥沃に違いない。しかし、農地として豊沃でなくても、眺望の主眼は、奇異で空想的な丘や谷間、峨々たる岩石などそれらの人工を加えない野生のままの自然の風景にある。」（フォーチュン：1969：157）

パノラマのような風景に魅惑されながらも、植物の生育に関係が深い土壌や地質の観察に余念がない。フォーチュンが日本での2回の滞在でどのような植物に関心をもったかを知るために、試みとしてこの『江戸と北京』に出現してくる植物名を日本と中国の部に分けて示したものが表2である。1頁に複数の回数出現しても、1回として計上している。北京を中心とした旅行がすでに4度目の訪中であり、しかもあらかた華南沿岸や上海などの植物を知っているフォーチュンにとって、北京で庭先や園芸業者、庶民が栽植するものの多くが南の産であり、めぼしい植物を探し当てられなかった失望を率直に表明している。

以下は天津での記述である。

「天津に来た私の主な目的は、ヨーロッパに送る珍しい植物を得るためだったので、例のように早速、苗木園について調査した。するとハンセン氏の隣人で、以前から天津に住んでいたワイルドさんが親切に、西郊の大運河の堤防のほとりにある大きな植木屋に案内すると言ってくれた。彼の申し出をありがたく受けて、ある日の午後そこへ視察に出掛けた。私がかつて訪れたシナの各地よりも、天津はずっと北緯にあったので、気候も以前調査した地方とは大分違っていたから、まったく新しい植物を多量に見付けられる希望と、大きな興味をもって、この植木や訪問を楽しみにした。

ところが行ってみると、奇妙なことには、多数の鉢植えの植物のほとんど全部が、かつて広東や福州でみた南方系の種類であった。素馨が中でも人気があるらしく、地上から少し高目の所に置いた空鉢の上に、何百鉢もの素馨が並べてあった。その他、キンモクセイ、ザクロ、ミカン、ライムなど、よく知られた植物が大量に、手入れも行き届いていた。北方の山海関のように、寒い地方の代表的なものは、オウバイ、ウツギ、スイカヅラ、バラ類などに過ぎない。

丁寧を迎えてくれた園主は、私が園内の植物を支那の現地名称で呼ぶので、幾分驚いた様子であった。私は園主に、もっと土地特有のものが見られないので失望したと言った。しかし、彼は明らかに南方の美しい植物栽培に熱中していたので、彼が力を入れていないのを見たいという私の希望は理解できなかった」(フォーチュン：1969：300-301)

日本でイギリスへ持ち帰るために、フォーチュンがもっとも注目したのはアオキという常緑の樹木である。訪日の目的の一つが、すでにオランダイ東インド会社によってイギリスにもたらされたアオキが雌木だけのため、雄木を求めることにあった。両者があいまってアオキの赤く小さな実が見られるのであり、観賞用としては、この赤色のアクセントが園芸に新機軸をもたらすと思っていた。アオキがイギリスの冷涼な気候にも耐えうることはすでに知っており、今回の訪問は雌雄異株のこの植物のつがいを見付けて移入することであった。斑入りという植物体としての奇形にも、観賞用園芸的観点からは異常な興味を示している。樹木としては、イチイ、イチヨウ、コウヤマキ、ツバキ、マツ、カシなどに興味を示しているが、やはり、その価値基準はイギリスに移入して育つこと、盆栽のような加工が可能なるものであった。ただし訪問した時期が春でなかったため、桜や梅については何も記述がないことと対照的である。

表2 フォーチュンの日本・北京での動植物の観察（『江戸と北京』での出現頁数）

	計	日本	中国	備考（範疇）
アオキ	7	7	0	木本
アスナロ	10	10	0	木本
アブラナ	8	7	1	作物, 草本
イチイ	4	4	0	木本
イチョウ	6	5	1	木本
イネ／米	7	6	1	作物, 草本
ウツギ	6	3	3	木本
エンドウ	5	2	3	作物, 草本
大麦	9	0	0	作物, 草本
カエデ	4	3	1	木本
カシ	8	7	1	木本
カブ	6	5	1	作物, 草本
キク（菊）	6	4	2	草本
キビ	7	0	7	作物, 草本
キュウリ	4	3	1	作物, 草本
クロマツ	7	7	0	木本
コウヤマキ	4	4	0	木本
ゴボウ	4	4	0	作物, 草本
小麦	8	8	8	作物
サツマイモ	9	7	2	作物
シュロ	4	4	0	木本
ショウガ	5	4	1	作物, 草本
スイカヅラ	4	2	2	木本
スギ（杉）	8	7	1	木本
チャ（茶）	10	10	0	作物, 木本
ツツジ	6	6	0	木本
ツバキ	7	6	1	木本
トウモロコシ	4	0	4	作物, 草本
ネズ（杜松）	6	3	3	木本
ナシ（梨）	8	3	5	果物, 木本
ナス	5	3	2	作物, 草本
ニンジン（人参）	6	3	3	作物, 草本
ネギ	5	4	1	作物, 草本
バラ	4	2	2	草本
ヒイラギ	4	4	0	木本
ヒノキ（檜）	4	4	0	木本
ブドウ	6	1	5	果物, 木本
マツ	15	12	3	木本
ヤマノイモ	5	4	1	草本
ユリ／百合根	4	0	0	草本
リンゴ	4	0	0	果物, 木本

注：1頁に複数回出現しても1とカウントした。

草本としてはキクにもっとも注目している。「日本の首都、江戸の郊外には、商売用の植物を栽培している、大きな苗木園が幾つもある。江戸の身分のある人びとは、すべての高度文明人のように花を愛するので、花の需要は極めて大きい。江戸の東北の郊外にある団子坂、王子、染井の各所には、広大な植木屋があったので、時を移さずに訪ねることにした」（フォーチュン：1969：104）。その距離を英国公使館のあった芝から9～10マイル、すなわち14～16kmと彼は推定している。根津に近い団子坂の（現在の文京区千駄木2・3丁目）菊人形の隆盛にも言及している。

江戸後期、19世紀の園芸は、植木屋の変質とも関わっている。すなわち、それまでの植木屋は武家屋敷や大名屋敷、寺院の手入れなど、いわば公的、かつ上層の人びとを対象としてきた。それが朝顔、万年青などの手軽にできる鉢植えの草花栽培によって、園芸が庶民に手の届く存在となった。しかもそれらは1年生の植物であるから、専門的な種子屋が必要となる。庭作りを専門とするアートの要素の強い職種に、園芸・生物的な「農」の分野が介入してきて、植木屋はその存在感を増していった。ここに筆者は花き園芸に特化した近郊農業の成立を推定したい。これを可能としたのは、購買者・消費者としての庶民、新鮮な花を供給できる交通網の発達、園芸技術の進化である。

4. 江戸の園芸家と園芸——団子坂・染井・王子——

「加賀屋敷を過ぎると東の郊外に達した。そこから2、3マイルにわたって、道の両側の所々に家並みのある、長い道がつづいている。この道を右に曲がって、日陰のある小径を通り過ぎると、間もなくあこがれの団子坂の町に着いた。この美しい場所は、両側に樹木の多い丘の谷間にあった。庭や釣堀や茶屋などはこの谷と丘の中腹にある。大きな茶屋の庭には、種々の魚を養殖している釣堀があるので、多くの釣師が魚釣りに興じていた。普通の方法で、釣針にみみずの餌をつけていた。

この庭で一番珍しいものは、菊の花でつくった人形であった。数千の花を使って作られた菊人形の美人が、微笑を浮かべて、茶屋や休憩所から出てくる客をしばしば驚かせていた。評判の梅林が庭内のいたる所にあり、小さな池や築山の島が、全体の眺めを引き立てていた。」（フォーチュン：1969：105）。

すでに日本の菊の美しさと高度な栽培技術に関しては、シーボルト『日本植物誌』やケンペルの『廻国奇観』、ツンベルク（1784）『日本植物誌』などによって基礎知識はもっていたフォーチュンであったが、この生きた菊を加工する菊人形という装飾園芸、見せ物におおいに興味をそられていることが読みとれる。

菊人形とは何か。菊で作った人形という定義では何も見えてこない。等身大で、顔は人形で、衣装を生きた菊で作る。根・茎付きの菊を2・3株ずつまとめて水苔で包み、蘭草・藁で

縛り「玉」を作る。それを胴殻といわれる人体を模した籠細工に巻き菊人形とする。3次元の胴殻に直線的な菊の茎を曲げ折りながら、しかも水あげが可能のように、生かさなければならない。それでも10日もたない。これを菊付けという。会場には補充の菊が片隅に置かれ、若い女性従業員がその世事に忙しく動き回る。菊人形のこの二律背反的な菊付けの職人技を担うのが菊師である。菊人形も生きた菊をいかに見せ物として演出するか職人は技を競い合ったのである（野間 2006：1-2）。

さらにこの団子坂から中山道を北へ向かうと王子、染井・駒込村がある。

「その村全体が多くの苗樹園で網羅され、それらを連絡する一直線の道が1マイル以上もつづいている。私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋はそれぞれ、3、4エーカーの地域を占め、鉢植えや露地植えのいずれも、数千の植物がよく管理されている。」「道の両側には温室を必要としない、日本の観賞用の樹々や灌木類、盆栽仕立やテーブル型に刈り込まれた植物が多く栽培されている。以前、私がシナからヨーロッパへ紹介した見事なイチイが、その短小灌木群の目立つ場所を占めている。そのほか多種類のマツアスナロ、ヒノキなどがあるが、コウヤマキはまさにすべてを象徴していた。」（フォーチュン 1969：109-110）。温室が日本に無いかわりに、冬の防寒のために柵のある小屋があったのを観察している。

盆栽も目をひく技術であった。「これらの小さな盆栽はすべて、その上に筵をひろげて強い光線をさえぎり、ひどい風からも保護されていた。」といかに丁寧な管理がされているかを驚嘆を交えて記述している。中国や日本での盆栽技術は、「植物生理学の最も普遍的な原則が一つの基礎となっている。樹液の流れを制限したり、阻害する癖をつけると、ある程度木や葉の形成をさまげる。接ぎ木をしたり、根を狭い所で押さえつけたり、水をやらずにおいたり、枝を曲げるなど、その他の多くの方法は、すべて同じ原理である」（フォーチュン 1969：111）として、その原理を体感して経験している日本の園芸家の力量を高く評価している。

5. キクとユリの文化交渉学

鹿島県大島郡沖永良部島は明治中期に野生テッポウユリの球根を採取して商品化し、欧米へ輸出で外貨を獲得して、隔絶した地理的位置にありながら日本一のユリ球根産地を形成した。沖永良部島でテッポウユリの野生をみつけ商品化を進めた契機となったのはまさにプラントハンターであるアイザック・バンティング（1850-1936）であった。イングランド生まれコルチエスター生まれで、横浜で球根輸出商社を開業し、ユリ球根を中心に輸出していた。

かれは日本の開港以後、美しい植物のフロンティアを求めて、南西諸島から九州沿岸の離島、西南日本を探索していた。なかでも白色の大輪のユリ、とりわけマドンナリリーといわれる種類は、イースターをはじめキリスト教の冠婚葬祭には欠かせない花であり、古来多くの絵



図3 永良部テッポウユリ百周年の碑
(和泊町喜留)

や建築物、道具などの意匠として描かれてきた。このヨーロッパで栽培されるユリがウィルスなどの蔓延で生産が落ち込んだ折、その代替物としてのユリを、プラントハンターたちはアジアの辺地に探し求めている。

バンティングが初めて沖永良部島を訪れたのは、漂着という偶然である。明治22(1889)年のことであった。つまり、それを温かく迎えたのが島民であり、上陸した和泊町の東海岸喜留^{きびる}の畑地の傍には、100周年を記念して1998年に建立された永良部鉄砲ユリの碑がある(図3)。この時期はすでに中国では、開港都市の周辺や沿岸諸州の採集や都市部の園芸家からの苗木・種子の購入でなく、雲南・四川省の奥地が注目されていた時期である。琉球・奄美列島はプラントハンティングの処女地であり、この時期、多くの国々の船が沿岸を航行していた。その流動した状況のなかで上記の漂着事件が起ったのである。

もともとテッポウユリは沖縄・奄美諸島が野生の原生地といわれるが、沖永良部島に特定できるわけではない。強風で潮がかかるような場所、隆起さんご礁の荒原でも育つ多年生宿根草である。通常は球根で増やすが、より多くの形質の同じ個体を作り出すためには球根の鱗片を地中にさしてふやしていく。実生は基本的にほとんど用いられない。しかし島民にとっては、テッポウユリは、愛でることも、墓場などに利用するもないまったくの野生の花であった。また、ユリ球根のなかには食用になる種類も一部にはあるが、テッポウユリの場合は球根自体に強烈な苦みをもつため、救荒食としてもほとんど利用できない。

まったく外部からの契機によって、これまで関心の埒外であったにテッポウユリの栽培化が島民の手で行われることになる。それまでは隆起さんご礁の畑地土壌が卓越して、水田はドリーネやウバーレといわれる湧水の得られる凹地で自給的に行われていた。主食はもっぱらサツ

モイモであり、食糧不足時には、ソテツのデンプンを水さらして食べるなど、自給的色彩のきわめて強い畑作農業主体の島であった。そこに外部からのインパクトで、島民の食糧にもならない商品作物としてテッポウユリ球根が定着していく。その過程については30年前に拙稿（野間 1978）で詳述した。もともと個体数の少ない沖永良部島の不利さを、島民の進取の気性、優良品種を選抜する篤農家の存在、横浜の輸出商社とつながった現地での集荷体制や優良球を選抜する検査体制の確立などがあいまって、南西諸島の離島としては突出した農業生産を戦前にすでに産み出していき、百合御殿といわれるりっぱな家を建てた成功者も多数生まれた。

とりわけ、その育成に熱心であったのが、島の北部、和泊町の国頭地区で、ここは海食崖の割れ目から噴き出すフーチャと呼ばれる海水によってサトウキビなどの農作物が塩害をうけ、他地域よりは収量も悪い貧困地域であった。その農民が中心となって、塩害にも強いテッポウユリの栽培化、品種改良に取り組んでいった。とりわけ除草には、手間を省くため塩水を撒布した。栽培化の不利な条件を逆手にとって、勤勉、進取の気性、商才をもって、日本一の産地形成をしていったのである。ここではその栽培過程を述べることは本報告の趣旨から外れるので、その概要をまとめた表3をかかげるにとどめる。いずれ別稿で考察してみたい。

ここで大きな転機となったのは、第二次世界大戦後である。海外のユリ球根需要が、他国産球根の増加で伸び悩むなか、国内市場中心に変質していった。しかも70年代まではなお沖永良部島の球根生産全国1位の座は揺るがず、島民はユリ景気に湧いた。

1975年前後に境に、テッポウユリ球根栽培は忌地減少が顕著となり生産量は減少していった。その減少に拍車をかけたのが1978年に島を襲った観測史上最大といわれる沖永良部台風による壊滅的な被害である。膨大な借金を抱えた島民は、返済のためより収益性の高い切り花移出に望みを託す。日本の輸入緩和政策で、園芸大国オランダから色の鮮やかなオリエンタル系交配種のユリ球根の流入増加がテッポウユリ球根の市場価値を下げていった。その挽回策が最初はフリージアやグラジオラスなどの単子葉植物の球根生産であった。しかし、しだいスプレーギクといわれる小菊類に生花生産体系に移行していった。現在では花き生生産額の44%がキクで、ユリ球根の生産額は全体の20%にすぎない。鹿児島県は現在、日本で最大のキク産地となっているが、その産地形成に沖永良部島が果たした役割はまことに大きい。

離島ゆえの流通上の不利は、冷蔵設備を持ったコンテナ船の導入と高速道路や空輸（東北・北海道が中心）で克服した。岡山以南で島からの出荷4日、九州では3日で市場流通する。しかし、ここで私が注目したいのは、経済原理以外の要因である。その究明のため、サンプル農家からの経営や作付体系の変遷などの聴き取りや統計、明治期以降の内外の史実との摺り合わせなどを援用して、輸送園芸作物の激変のなかに潜む変化の要因と、その背後に通底する不変原理を考察した。次の3点が暫定的な知見である。

- 1) ユリ、フリージア、グラジオラスは球根生産、キク（挿し芽）は生花出荷ではあるが、いずれもC. サウアーのいう栄養繁殖による商品作物である。栄養繁殖の再評価（池橋

表3 沖永良部島のユリ球根生産・ユリ栽培の時期区分

時期区分	主要事件	品種	技術	組合	外的条件	主たる商品対象
1. 野生種採取	1889年 アイザック・バンティン グ百合栽培を奨励。 喜美留で栽培が始まり、国頭、西原、出花に栽培普及	国頭根太 (～S初期) 喜美留黒軸、アンゴ (～1969)	肥培	個人対応 リーダーの存在	イギリス、オランダのプラントハンター	球根
2. 野生種肥培、鱗片繁殖	1906年 高木商会、田中商店、ロバート・フルトン商会、新井商店、横浜植木の五社が野生百合を共同買付した	ローカル優良系統品種の選抜	鱗片繁殖優良品種の選抜	個人対応 リーダーの存在	商社との取引、世界情勢把握	球根
3. 外国輸出全盛	1908年 大島郡農会により一手販売開始 1917年 重要物産同業組合法の規定中の重要輸出品に百合。新井清太郎商店と生産者が一体となる集荷責任者制度(共販の否定) 1914年 百合景気 1932年 日本百合根輸出組合結成された。百合騒動起発生。	ローカル品種の選抜	鱗片繁殖	1917年 集荷人制度。 1929年 和泊知名両村で沖永良部百合同業組合設立。 アメリカ合衆国、ヨーロッパ輸出	球根	
4. 戦時体制	1939年 第2次世界大戦勃発。英国が百合根輸入禁止。	ローカルの種保存	保存	個人	輸出不能種の保存	球根
5. 輸出復活	1946年 臨時北部南西諸島になる。市来政敏を中心に栽培再開。政府貿易の実務代行のかたちで新井清太郎商店と横浜植木株式会社がアメリカに輸出。 1953年 日本復帰、球根生産加速 1953年 鹿児島県農業試験場で花き試験研究開始。試験場品種(沢元アンゴ)	鱗片繁殖	集荷人制度	欧米へゆり球根輸出 研修・視察	球根	
6. 国内ユリ球根特化と多様化	国内向けの球根市場へ、フリースタイルを八丈島から導入、グラジオラス球根生産。野菜・タバコ生産。	商社、種苗会社品種	鱗片繁殖多様な輪作体系	集荷人制度の陰り	国内への球根移出へ	多様な球根、野菜
7. 切り花輸送園芸への移行	1977年 沖永良部台風 1980年 花卉中核産地育成整備事業で集出荷施設、冷蔵庫が建設 1988年 ジョージアのメリクロンを協和発酵工業株式会社から導入。 1990年 花博で国内花ブーム、和泊町実験農場落成	商社、種苗会社品種(新たな種苗会社とのネットワーク) 自前農場での改良、普及	バイオ技術設備の高度化 自前農場での改良	1980年 集出荷施設が完成し、沖永良部花き園芸組合が設立 1986年 沖永良部花き流通センター設立	国内花き産地との棲み分け	花、球根との併用

8. 輸送園芸への特化	1994年 農業による地下水汚染方面化 国頭が天皇杯受賞 1995年 オランダ王国産百合が条件付きで隔離検疫免除→自由化 1998年 百合栽培100周年4月28日記念式典	ユリはジョージア、ひのもとに統合。 オリエンタル系百合球根の栽培、環境保全型園芸の模索（堆肥循環、土作り）	1993年 親子鱗片繁殖の推進啓蒙。個別地下水灌漑普及。電照栽培。平張。	沖永良部花き流通センターでの共販	オランダからの品種導入	花、球根との併用
9. 近未来	切り花生産の鈍化 専業花き栽培農家の新戦略	商社、種苗会社品種	地下ダム（10年後）	沖永良部花き流通センターでの共販	外国花き（マレーシア、台湾、ベトナムとの競合）	花

2005)をも考慮すると、沖永良部島には、モチ性のアワのほか、タイモ、サトイモ、サツマイモや最大の工芸作物のサトウキビまで、この伝統が連綿として継承されていることがわかる。イネでさえ、刈り株からの再出穂も期待されていた可能性も否定できない。

2) 南西諸島は冬作物が卓越する例外的な地域として佐々木（2003）が注目しているが、キクもここでは典型的な冬作物で、独自の輪作体系を継承する。

3) 冬作物はまた台風被害を避ける防災作物でもあるが、キクもその例外ではない。

これらの知見を文化交渉学の視点から敷衍すると、海外からのプラントハンターを介したインパクトで、これまで島民が考えてもいなかったテッポウユリ球根の生産が、特異な離島経済を創出したといえよう。それは、生花を移出できない離島の不利な経済体制に適応したものであった。ただ、ユリ球根は投機的性格をもち、生産過剰による暴落と好景気の循環が繰り返され、国際価格の景気変動に島民が一喜一憂する状況を生み出していった。国内生産に戦後はシフトしても、その性格は維持された。栄養体繁殖によるイモ文化が南西諸島から台湾、フィリピンにかけては濃厚であるが、沖永良部島には水田で作付ける熱帯性サトイモであるタイモ（田芋）の儀礼が重要な節目に維持されており、上に上げたような共通の素地が指摘できる。ユリもその後継であるキクにしても、挿し芽で増やし、種子ではふやさない。その類似性を栽培技術の素地として、ずっと継承しながら、冷蔵設備の導入によって生花を日本国内へフェリーと高速道路や飛行機を利用した集中・大量出荷によって運ぶことで技術革新を達成したダイナミズムは、文化・技術の継承の側面からも興味ある文化交渉のテーマである。

6. 終わりに

これまでヨーロッパのプラントハンター、とりわけイギリスのプラントハンターたちとアジアの植物を求めさまざまな相互交流がみられた18～19世紀の中国、日本での状況を縷々述べて

きた。プラントハンターと総称される人びとは概してエリートではないが、徹底した実践・現場主義者であるとともに、科学的知識をおのずと身につけて、博物学の発展に側面から寄与したことも見逃せない。その輩出地がスコットランドやイングランドの農村部という辺境、縁辺の風土であったことも重要である。もともと植生の貧相なイギリスで、美しい花や樹木を海外から導入して、賑やかで豊かな庭園を庶民までつくっていく国民性は、日本人や熱帯地域の人々にはなかなか理解できない屈折した感情でもある。未知の世界、それもイギリスよりは温暖で豊かな植生、植物を有する植民地の獲得は、そのロマンをかき立てるとともに、植物がビジネスになることを教えてくれる格好の事例でもある。また、その形成にはキュー植物園園長のバンクスのような、カリスマ的なパトロン、支援者、リーダーシップがあったことも忘れてはならない。その情報網の詳細な分析も残された課題である。

これまで述べてきたプランハンティングにかかわる文化交渉には下記の6つのタイプが想定できる。①移出、②奨励、③改良、④移植、⑤変容、⑥置換。

ものを単に域外に出すだけならば移出であろうが、移出先ではそれ反応・適応したさまざまなアクションが見られる。受容のみならず、拒絶もありうる。多くは選択的なフィルターを通してなされるため、不変部分と変化部分が共存する。

今後、個別のアジアのプラントハンティング、植物探査の事例を、その地での対応、反応から考察していくことが筆者に与えられた課題である。本報告はその前段階、予備段階のラフな見取り図を描いたものと考えていただければ幸いである。

主要参考文献

- Mary Gribbin & John Gribbin. *Flower Hunters*, Oxford Univ. Press, 2008.
- E. M. Cox Plant-Hunting in China: A History of Botanical Exploration in China and the Tibetan Marches
- R. E. R. Banks and others eds. 1994. *Sir Joseph Banks: A Global Perspectives*, The Royal Botanic gardens, kew.
- Robert Fortune 1852. *A Journey to the Tea Countries of China*.
- Robert Fortune 1874. *Three Years' Wandering in the Northern Provinces of China*.
- 池橋宏 2005.『稲作の起源 イネ学から考古学への挑戦』(講談社選書メチエ), 講談社。
- 京大探検者の会編 2006.『京大探検部1956-2006 (部創設50周年記念出版)』, 新樹社。
- 大塚秀章監修・解説 2007『シーボルト 日本植物誌』筑摩書房。
- 佐々木高明『南からの日本文化(上)・(下)』日本放送出版協会, 2003。
- 白幡洋三郎 1994.『プラントハンター—ヨーロッパの植物熱と日本—』, 講談社。
- 高橋雄造 2008.『博物館の歴史』, 法政大学出版会。
- 遠山茂樹 2002.『森と庭園の英国史』, 文藝春秋。
- 中尾真理 1999.『英国式庭園—自然は直線を好まない—』, 講談社。
- 野間晴雄 1978.『野生ユリの栽培化から球根商品化への過程—鹿児島県甌島と沖永良部島の比較—』, 人文地理 30-3, 19-34頁。
- 野間晴雄 2006.『菊に寄せて』千里地理通信(関西大学地理学教室会報)54号。
- 野間晴雄 2008.『フンボルト・中南米の風景序説—探検から調査への架け橋—』, 関西大学東西学術研究所紀要 41輯。

- 野間晴雄 2009. 「海外からの植物移送・保存技術に関わる史料（翻刻）—大英帝国プラントハンターの元締め J. バンクスによる手引き書—」, 関西大学東西学術研究所紀要第41輯。
- 春山行夫 『花の文化史—花の歴史をつくった人々—』, 講談社, 1980。
- 平野恵 『19世紀日本の園芸文化—江戸と東京, 植木屋の周辺—』, 思文閣出版。
- 文京ふるさと歴史館編 2002. 『菊人形今昔—団子坂に花開いた秋の風物詩』 平成14年特別展図録, 文京区教育委員会。
- 茂木静夫 1998. 『ボゴール植物園』, 日本図書刊行会。
- コックス 1998. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (一), 大阪国際女子大学紀要24号第2号, 1998, (原著は1945)。
- コックス 1999. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (二), 大阪国際女子大学紀要25号-1。
- コックス, E. H. M.・山本和子訳. 2000. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (三), 大阪国際女子大学紀要26号-2。
- コックス, E. H. M.・山本和子訳. 2000. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (四), 大阪国際女子大学紀要27号-1。
- コックス, E. H. M.・山本和子訳. 2002. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (五), 大阪国際大学 国際研究論叢第16巻第1号。
- コックス, E. H. M.・山本和子訳. 2002. 『中国植物探検—中国及びチベット辺境における植物探検の歴史—』 (六), 大阪国際大学 国際研究論叢第17巻第2号。
- フォーチュン, R. E. 三宅馨訳 1969. 『江戸と北京』, 廣川書店 (原題は *Edo and Peking A Narrative of a Journey to the Capital of Japan and China*, 1963)。
- ホイットル, 白幡洋三郎・白幡節子訳 1980. 『プラントハンター物語』 八坂書房。